

三河アララギ

2020年 8月 葉月 はづき

八 月 号

第 六 十 七 卷 第 八 号



ニューヨーク日記(166) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

BUNKER VIETNAMESE

Blue Shoe Diaries



最近ベトナムに行ったにも関わらずベトナム料理が食べたくってニューヨークで一番美味しいベトナム料理のレストランBunkerへわざわざブルックリンまで行ってきました。本場の料理と言えるくらい美味し～近所にあつたら毎日食べに行きそうだからかえってちょっと面倒な場所で良かったかも。

Despite having been in Vietnam not that long ago, I still crave Vietnamese food! So we went to the best Vietnamese restaurant in New York called Bunker. It's in Brooklyn, a bit of a trek to get there but the food is worth it! Everything we ate was on point and the tofu and mushroom dish was truly special.

目次

第六十七卷第八号(通卷八〇〇号)

表紙・ウバユリ 今泉 由利(1)

ニューヨーク日記(166) Blue Stone(2)

アカンサスの徑 御津 磯夫(4)

ははきくさ 大須賀寿恵(5)

歌集「續々草々」 今泉 米子(6)

ははきくさ 河原 静誠(7)

思ひ出 岡本八千代(8)

田植え 弓谷 久子(10)

「白ら」 今泉 由利(12)

馬鈴薯の花 安藤 和代(14)

入梅 清澤 範子(15)

のろのろ歩き 伊藤 忠男(16)

息吹 矢崎 直人(17)

茅の輪 森岡 陽子(18)

水族館 白井 信昭(19)

鶯の声 杉浦恵美子(20)

ねぎ坊主 阿部 淑子(21)

麦秋 山口千恵子(22)

梅雨に入りたり 夏目 勝弘(23)

『ことよせ』 いーはとぶ 牧原 正枝(24)

石田 文子(24)

森 厚子(24)

山崎 俊子(24)

三田美奈子(24)

水野 絹子(25)

牧原 規恵(25)

稲吉 友江(25)

鈴木美耶子(25)

吉見 幸子(25)

現代学生百人一首 東洋大学

中西ことみ(26)

藤沢 未羽(26)

西田 美優(26)

森川 千咲(26)

齊藤 華茶(27)

岡田 直子(27)

長浜 由佳(27)

上村 風汰(27)

森岡 陽子(28)

贈呈誌 童謡 アリとハト／おむすびころりん

高橋 育郎(30)

浜田 紀政(32)

田中 清秀(32)

松本 周二(32)

山迫 京子(33)

重野 善恵(33)

森岡 陽子(33)

山元 正規(34)

植村 公女(34)

木村 歩歩(34)

今泉 如雲(35)

今泉 由利(35)

かさね吟行会 田中 清秀(36)

『酔いの徒然』(100) 丸山醉宵子(38)

楽しい時間(93) 山本紀久雄(40)

絹の話(117) 今泉 雅勝(42)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬 本田 勇氣(44)

『江上浩二の独り言』 江上 浩二(46)

漢詩研修(四十六) 平井 茂行(48)

『タカシ』 中屋 保之(50)

飲酒 横山 精真(52)

仏像彫刻(七) 藤崎 徹(54)

見る(二) 夏目 勝弘(56)

『氷魚』のことから(235) 岡本八千代(57)

編集室だより(二〇二〇年六月) 今泉 由利(58)

野菜・果物・まんだら(30) (59)

『三河アララギ』について (60)

アカンサスの徑

御津磯夫

つきねとは一人静のいひにして大和垣山に生ひにけらしも
月光にいでて月かげを仰ぐべしおのづからなる疑もなく
ただ一本稚き冬木たつ見れば折ふしにして小鳥がとまる
片手つきてベッドの上に一、二分横坐りせるも今日のよろこび
数ふれば治りし症状いくつもあり残る幾つを待てば氣遠し
あかときの東の空に消えてゆく細き月あり消ゆるまで見る
右の窓に西空少し見えをりて夕べの星の一つをたよりとす
担架にて黄素馨のわが門に入る病をさまり帰り来りて
下腹部の巨き手術痕抱へつつああ父母のなき家に帰へりぬ
ひとりにて立ちあがり得たるよろこびにこゑたてて呼ぶわがつまの名を

ははぎくち

大須賀寿恵

副長の写真かすめ来てパス入れにひそかに持てるは吾のみが知る

耕耘機の音響き合ふ野の中にひとり吾が兄は牛使ひゐる

残業を続けつづけて整へし書類の監査三分にて終る

天皇皇后皇太子迎へし護岸をも高潮はつひに乗り越えて来ぬ

高潮に根元まで洗われし浜木綿の中の一つが青芽ふきたり

水害の友いくたりと数へつつ吾子は貯金箱の五百円をいふ

抜ききれぬばかりに増えて来し白髪うつして今朝も鏡に対ふ

子を叱りその手もちて己が髪くしけずるときわくらばの落つ

四日間の旅のつかれも吾が家の灯見え来て歩み速くなる

八十の老教育長よりやわ肌の与謝野晶子を聞くは楽しも

歌集 「續々草々」

今 泉 米 子

夕暮れのまだ明るくて行平に炊きたる粥を盛り分けてをり
いち早く出でたる苦竹の竹の子は藪より遠き沙羅の木の根に
常の日の夕べの片付け終りたりほつほつ白し十葉の花
長靴の埋まるばかりの十葉の花を分けつつ夏柑を追ふ
晩年の父は雨には正信偈写経しましきこの小机に
毛筆にて医学書を浄写せし素木の小机われにのこれり
賜はりてはや十八年のアカンサス庭草抜きて揃ふ立房
一叢の朱は槍鶏頭の萌えにして午後かの豫報に降る雨はまだ
風蘭は垂れつつ咲けり二百年の稜かの缺けたる青磁の鉢に
思はざるわが眼の前に天に向き泰山木かのとがれる蕾

ははぎくち

河原静誠

姿のみ僧衣まとへど吾が心うつろ多きに病魔のひそむ

みほとけの慈悲のまなざし仰ぎつつ法然教学にひたすら励む

焼跡に園舎再建なりし今日幼児とともに園歌をうたふ

赤き青き色さまざまに塗装せし新たなる園舎に今日より遊ぶ

吾がからだ健やかなれとクロッカスの伸びいづる芽を朝々にみる

彼岸会に日想観法修せむとて夕焼け空をわが仰ぎ観る

監査日と心は御津に馳せながら泪ぬぐいて手術台に上る

廻診のドア開かれし一刹那かすかな鼓動に傷のうづける

紙灯笼千羽鶴など折りたたみ静養の日の今日も暮れゆく

薬包紙をためて折りたる千羽鶴千羽にちかし朝の風に舞ふ

思ひ出

蒲郡 岡本八千代

思ひ出は昔昔のことばかりなにゆえこんなに浮かびくるのか

親しき人君も君さへ鬼籍の人ひとりわれのみ思ひ出の中

思ひ出のあの時この時また浮かぶそして今ある私の不思議

この朝も白き十葉の花ざかり腰かけてゐし亀石に君は亡く

相変らず白マスクして庭に佇つ鳴海の友よりの紫陽花咲き初めて

今日の風北より南へと吹きゆけり風よ風風コロナを殺せ

教え子ら誰か彼かが手造りの模様美しきマスクくれたり

教え子らにもらひしマスク今日もかけてしばし佇ずむ雨ふる庭に

マスクして傘に降る音雨の音ききつつ思ふ「傘さして来よ」を

今は昔三河アララギの歌会にもらひし手作りの薬玉くすだま二つ

薬玉をわれに下されし人の名よ吾と同じき八千代といふ人

八千代さんにもらひし大きな薬玉を衝立ついたての両横に今日より飾れり

玄関を開けたれば揺るる美しき薬玉二つのそれぞれの長房

叱られても笑はれたるも楽しかりき御津先生の嘗かつての歌会

ゆらゆらと老いの時間を味わひつつ暮してゐますありがたきかな

田植え

豊川 弓谷 久子

父母と共に田植えをいそしみ日の思い出よ今日は梅雨入り

小学校も田植え休みの一週間忙しかりけり楽しかりけり

早苗田に母と並びて苗をとり小束にからげぬ母の真似して

あの日から七十五年か沖縄戦に散りし女子挺身隊偲ぶ

世にあらば我が同世代沖縄のひめゆりの塔憶ふひと日よ

水やりに今日も追はれぬとどりの花咲き揃ふ我の紫陽花

月に一度の外出日なり検診日馴れぬマスクを我もかけをり

四月まであと戻りせし気温なり氣候の変化にうろうろとして

日食を待ちゐし太陽雲の上かすかな光がもれて来るのみ

裏庭より日陰の多き中庭へ椿の鉢を移しやりたり

草とりは暫し休まむ今日も又梅雨の晴れ間を真夏の暑さ

紫陽花のあとは向日葵楽しまむ我の背丈を越して並びぬ

城崎の夜景がテレビにうつりをり読みそびれたる一冊を思う

九州は大雨とニュース流れ来る明日は我が身か梅雨も深まる

久びさにお墓参りに帰省する甥を待ちをり水無月も逝く

「自ら」

東京 今泉 由利

船に乗り飛行機に乗り二万キロ着きたる所にしばらく住みぬ

自らの心のままに五七五七七和歌に拠りぬ真地球の上

自らを計らず測らず図らないあるがままにて自らのまま

地震には逃げゆくべしとの竹藪の竹を切りたり七夕まつり

短冊に「天の川」と書きしこと夜空に長く天の川ありき

暗黒の地球の時があつたこと明るみ初めしは億年前

地球より探しいだせし鉄をもて砂岩積みあぐアンコールワット

人間は石を積みあげアクロポリス
ペンギンは石を集めて巣造りを

駿河湾の深く深くにをりしこと
両手に掬う干し桜海老

この頃を延びはじめたり
コーヒー木ひととき並んで日向ぼっこ

場違いのこのベランダに
育ちゆくコーヒーの木を守りかゆかむ

掌に乗せて連れこし
コーヒー木と三年の日々暮せり共に

始めが「阿」終りが「吽」
まんなかには修業のありし

立ち姿踊る姿の素晴らしい
「皆で一緒に」と言葉優しい

見聞の幾つか増えたこの命
続けてゆかむこのままそっと

馬鈴薯の花

豊川 安藤 和代

便りなく電話もなくて友も来ずコロナコロナのひと日は長し
母の衣をときて作りしベストには母の香のする母の声する
はつ夏の庭に五本の苦瓜を植えて今年も元氣わきくる
嫁逝きて十年なるも母の日よそれにはふれず孫と茶を飲む
庭草に混りコスモス芽生えおり五センチ丈がいつぱい
植木鉢除けばぞろぞろダンゴ虫逃げる丸まる命たくまし
宣言の解けて心は青き空馬鈴薯の花も楚楚と揺れいる
水張田は土手の緑の草写し雲を写して夕暮れてゆく
事もなくひと日の過ぎて幸せを思えば遠く田蛙の声
紙一枚ペン一本の吾が趣味は歌作りです最高のとき
過去未来今をも歌に詠みゆけば向日葵は高く窓にほほえむ
今以上の幸せなどは望まねどただひとつのみひ孫を見たし

入梅

春日井 清澤 範子

若葉深く緑に変わりし椿見て入梅の今日小寒く暮るる

鳥の声聞きて目覚める今朝の雨床の中にて静かに聞きぬ

堤防に添ひて散策杖つきて小鳥の声に癒されながら

武者隠し付くる室には出窓あり入梅の晴れ間の明るかりけり

吾がのむ薬の副作用強くしてこのふらつきに杖を離さず

畑を囲むレンガの外の草むらに茗荷のとがりめつくつくと生ふ

夕食の後のひととき歌を読むまた献立の本も広げぬ

異常気象続きてをりて吾が室の衣類の入れ替え過ぎゆく一日^{ひと}

歌稿出すポストへシルバーカー押して帰り来るなり陽のあるうちに

急に吾の腰痛み出しめまひする薬一錠増やし過しぬ

のろのろ歩き

大阪 伊藤忠男

「和歌山に住みしものなり」ラベル貼り車でスーパー今日最後なり

雨垂れの軒打つ音に夢うつつ今が至福の僅かなる時

水無月も晦日になりて愛でし花やと許さる長谷寺の旅

懐かしき脳裏をよぎる思い出をかき消す速さ豊橋の町

雨露を受けて浮き立つ紫陽花の濡れた花びら艶やかなりや

横浜の街は寂しき灯り消え今は日曜夜8時過ぎ

我負けじ煌めく星に真珠玉目尻あしらうフェイスガードで

よそよそしフェイスガードに遮られ身体離してグラス傾け

マスクかけうがい薬に欠かせぬは手指消毒これ持ち歩く

感染をぜずとも厳し都市封鎖コロナ太りにコロナストレス

息吹

東京 矢崎直人

雨音に繙き写す歳時記の息吹や調べ心に耳を

六月の風照り返すアスファルト金銀眩しキラキラキラと
堀之内古道具屋の窓の内浮世絵団扇涼をいただく

家と家窓と窓を鳩の飛ぶこれから遠くに飛んで行かんか

猫が待ち鳩と雀が並んでる暖簾の前の小さな世界

朝顔や雨露受けて睡たげに青き花卉に五月雨集め

朝顔のすぼんで落ちる梅雨晴れ間青き色消え白桃の筒

つくばいや金魚の跳ねる水の音赤い背中に六月の風

学び舎の子どもの声を取り戻し色とりどりの傘ランドセル

西巢鴨濡れても飛べり梅雨の蝶紺色帽子子どもの見つけ

茅の輪

東京 森岡陽子

黒い蜂姿現わし突然にバス待つ吾に向い飛び来る

主の居ぬ屋敷の庭に茂る葉々重なり合ひて結ばるること

線路際身丈半まで咲く葵梅雨の終るを待つや天辺花

仰ぎ見るゆるゆるゆるとハンカチの花風にゆるる初夏の午後

遠慮なく路地まであふる紫陽花の白毬重き青毬重く

一時は雨粒強くも直ぐやみて霽はたばた森の青時雨

祈りこの茅の輪くぐりて平穏な日々よ戻れコロナ禍消へよ

マスクして近所歩くと会う人もマスク姿に離れて小声で

梅雨晴間十葉の咲くのびのびと何時の間にもやら白さ生き生き

水族館

豊川 白井信昭

春の雨落ちそで落ちぬ水滴がコデマリ潤すみどり色づく
解除後もアベノマスクを日日掛ける三密を避け妻とゐでゆく
角口の満開近きモッコウバラ低気圧通り蕾を散らす
入り出口蕾のあまた咲き垂るるウイルスよそに花は健やか
今は亡き一定さんくれし庭花木生きる縁妻よすがと偲べる
孫匠真乗せベビーカー押す農道に行き交う人のなきが幸せ
み社の造営記念碑に白く咲く五弁の花片はなびら香りよきかな
岸壁は竹島埠頭駐車場観光船の一隻だに見ず
ほの暗き順路水槽の窓に寄り匠真は魚に指指しながら
踏台に匠真を下ろし試みに触れさせみたしその長き足に

鶯の声

蒲郡 杉浦恵美子

形中の脇を通ればテニスコート雑草伸びて時止まるまま

初めての山道行けばゆくりなく西浦温泉真正面に見ゆ

小満の西日を受けて閑かなり彼方のビル群西浦温泉

今朝はまた鶯の声盛んなり梅雨間近なる曇りの空に

風に乗って始業のチャイム流れ来る三月ぶるか頼もしく聞く

自粛要請解けて最初にしたのはやはりわたしは人に逢いたい

人に会わぬこの二ヶ月は普通じゃない喋って笑って共感したい

家に居て自分と向き合うのも大事人との関わりさらにさらに大事

向き合へば向き合ふほどにこの我の己を通す我執の強さよ

西行の出家は仮の姿にて生涯生身の人にてありけり

今人と関われぬから人恋しコロナ禍の中気づき得しこと

ねぎ坊主

横浜 阿部 淑子

ふと薫る思いの先に出で見れば八重のくちなし咲き初めており

窓を開けクーラー付けてマスクして四か月ぶりの合唱練習

マスク付合唱成るか戸惑えど心の声は和して流れる

赤きバラに添えて色紙は「おめでとう」百二十歳までと仲間の励まし

六月の採血予定日病院へ造血のため夫は注射も

自粛中とかくつけてた座りぐせ「どっこいしょと」増えしかけ声

東の中そつと顔出すねぎ坊主花数えればなんと八十輪

麦 秋

豊川 山口千恵子

アスファルトの道路のへこみの水たまり雨上がりの空うつす

新聞の集金人と話したのみあとは誰とも会話なし

たどたどと夫がピアノを弾きてゐる話すこともなく日々過ぎてゆく

庭の梅脚立にのりてもぎとりぬ二キロ余りを梅干しにせむ

塩漬けせし梅に梅酢の上りきぬ紫蘇を求めてスーパーに行く

たちまちに休耕田の麦熟れて明るくそよぐ麦秋のとき

たちまちに休耕田の麦刈られ広々続く麦の刈りあと

大型の機械に麦の刈り取られ小鳥らむれなし刈りあとあさる

しとしとと一日雨の降りてをり梅雨入りなりと発表のあり

暑かりき昨日の晴天はうそのごと梅雨に入りたる午後よりの雨

やはらかく楓は芽ぶきはじめたり窓辺の彩りみどりすがしき

梅雨に入りたり

豊川 夏目勝弘

梅雨入りとネムの初花と揃ひたり西施の色香を思ひめぐらす

ネムの花の色香は短かしたちまちに路面を汚す淡きくれなる

象潟に旅せし遙か盛夏なりき西行芭蕉子規の後を追ひ

梅雨入となりし証しと雨つづくヒマワリの苗を植ゑしは正解

梅雨空の晴れ間は今日の一日のみ自転車にて米を買に出る

道路まで枝の覆ひしネムの木の花の終れば枝を縮めん

濃緑の両葉の上に残りゐるネムの花ばな死せる色して

ネムの木はマメ科なりせばマメの莢あまた下がる木下は哀し

ネムの木は家具材になると我が一木三十年後に何を作らむ

『いよよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

食みしては埋めてみることに何粒か腐養土覆ふ芽ぶくアボカド

牧原正枝

「駿足」「エア」「厚底」とシューズをば研究すそのなかのわが足

春霞マスクの人ら街を行く若葉の中にコロナ蔓延る

石田文子

友の歌詠み返すこと二度三度作者は誰方か思ひ巡らす

足場とれてベージュの壁に赤屋根の家の夕映えわが家の跡地

森厚子

コロナ禍の外出自粛はなくなりて友と語らふ今のしあはせ

城山に苞立つ樟のかそけさよその下に来て本読むわれは

山崎俊子

ひもすがら胸にとどまることばありやうやくこの朝胸底におつ

あの友も老人施設に入りしとぞ今宵の知らせにさびしくなりつつ

三田美奈子

気兼ねなき友にてありき君とわれ連れ合ひの愚痴も語りあひしに

「この先をいかに暮さむ仕事無くば」君は猫にも語れる人かな
問はれし猫弱り始めて二月余静かに逝きぬ小雨降る朝

水野 絹子

部屋の隅に置きし念願の冷凍庫時々聞こゆモーターの音よ

牧原 規惠

新築の物置小屋の押し入れにはやも捨てられぬ物物物

母の日に娘より届きしスカーフに添へて手作りマスクもありて

稲吉 友江

軽トラで家々まはる魚屋の初夏の魚の光うつくし

春雷はいつまで鳴るかとわが問へばいともあつさり「わからぬ」と夫は

鈴木美耶子

夕べは五月わがアンコウの鍋料理熱熱すぎてわれら湯気の中

春となりステイホームのあらざる日々今は空間の自由となりしか

吉見 幸子

マスク姿行き交ふ人の口元には小花模様の手作り美し

現代学生百人一首

東洋大学

ただいまと靴を脱ぎ捨て駆け込むと目には見えない祖母のおかえり

静岡県立科学技術高等学校三年

中西なかにしことみ

アルバイト笑顔で貯めた諭吉様一人二人と旅立つのですね

静岡県立下田高等学校二年

藤ふじ沢さわ未み羽う

母の愚痴携帯ばかりいじつてと操作指導で立場逆転

沼津中央高等学校二年（静岡県）

西にし田だ美み優ゆう

ケータイをもつまえ交わした文通の貴方の書いた字愛しく思う

京都産業大学附属高等学校一年

森もり川かわ千ち咲さき

聞かせてよ君の心の苦しみを今日も一つ机がガラリ

大阪市立勝山中学校二年

齋藤華茶

教室で百人一首を学びつつまだ見ぬ恋を想ふ五月雨

四天王寺高等学校二年（大阪府）

岡田直子

思い出の花に包まれ寝る祖母のいつにもましてやすらかな顔

関西学院中学部二年（兵庫県）

長浜由佳

過ぎ去った台風がまだ生きている被害がますます拡大してる

神戸市立科学技術高等学校二年

上村風汰

贈呈誌

森岡陽子

鹿兒島アララギ 第825号(終刊号)

○夕映えの藪の小枝により添ひし番の小鳥をしばし見てゐつ

市来房枝

○浅き瀬にゆらゆら揺るる春の藻に光は射してその影ゆらく

樗平頼子

○山並を背に都府楼跡は春うらら連^{れんだ}風あぐる子供らが^{はしや}燥ぐ

泊興子

○高らかにピースピースと鳴くシジュウカラにふさぎの虫の払はるる思ひ

奥悠子

○丘に立つ裸木は海風に吹かれしか同じ方向に傾きて立つ

池田和子

○天狗池に映る槍ヶ岳をながめつつ岩に座りて雲去るを待つ

江藤金博

○朝の戸を開くれば香る蠟梅の爽やかにして深呼吸する

郡山禮子

○思ひこし秋吉台の空澄みてたたなはる草丘に白き石群

重盛ヒサ子

○海原を一筋真赤に染めながら水平線へと夕日落ちゆく
○十一面観音の前にひれ伏して吾は泣きたし声を放ちて

中山タマエ
益山 苜子

冬雷 7月号

○大雨に土砂流れたる岩間より水音たてて流るる清水
○雨上がり巢穴這い出す大き蟻身の丈程の花穂引き行く
○山に啼く鴉の声のただならぬ叫びに聞こゆひとり歩けば
○真新しき畝に生姜の芽吹き待つ段々畑は春陽を浴びて
○神事のみ祭礼なりて産土神の鈴の音ひびく間を空けながら

兼目 久
斉藤トミ子
古嶋せい子
川上美智子
武田清一郎

アリとハト

高橋育郎 作詞

アリんこ みずべを あるいていたよ

こりゃたいへんと アリんこは

おおかぜふいて とばされて

おっさんのあしを がりつとかんだ

おみずにはまって さあたいへん

いててというて うつてはみたが

それをみていた ハトぼっぼ

たまははずれて あたらなかつた

いそいで このはをうかばせた

このはは いのちのたすけぶね

アリんこ おかげでたすかつた

アリんこ おさんぼしていると

てっぼうもった おっさんが

ねらっていたのは ハトぼっぼ

おむすびころりん

高橋 育 郎 作詞

おむすびころりん ころがった
じいさんあわてて おいかけた
おむすびあなへと おちていく
あららじいさんも おちていく

あけてびつくり たからもの
よくばりじいさん みてたとさ
わしもたからが ほしいよと
ねずみのあなへと おちていく
さあさ だせだせ はこをだせ
じいさん おおきいはこもらう

あなのなかでは ねずみたち
おいしいおにぎり よろこんだ
ごちそうさまです おじいさん
おれいに はこをば あげましょう
じいさん ちいさいはこもらう
いえにかえって ばあさんと

よろこびかえって あけたらば
なかからおばけが によるんによろ
よくばりじいさん こしぬかす
もうこりこりだ ごめんなさい

『俳句』

花々に傘差しかける梅雨の入り

浜田紀政

夏シャツのどつと乗り込む男子校

五月雨やベンチの下の猫二匹

木戸口に傘をたたみて梅雨晴間

田中清秀

梅雨晴れや湿る芝生のひづめ跡

花蜜に小虫寄り来る梅雨晴間

梅雨晴間昨夜の嵐に清められ

松本周二

浜離宮ビルの谷間の梅雨入りかな

蓑^みまとひ旅立つ姿栗の花

木下闇四ヶ国語の道標

山迫京子

たたんでも形状記憶夏帽子

素つびんを隠すつもりのサングラス

鉢移す底より蚯蚓躍り出る

重野善恵

驟雨去り常盤木落葉置きみやげ

紫陽花をほめて数輪持たされる

開け放つ堂や僧侶の夏衣

森岡陽子

滴れり海へと続く切り通し

病葉やコロナ禍避くも通り風

雲海の島の一つに百名山

山元 正規

砂の手で拭ふ泪や雲の峰

ほつれしは飛沫となりて滝の糸

梅雨寒や梁高き昼のビヤホール

植村 公女

マニキュアの摘むひと切れ茄子漬

休校の門扇の錆や夏つばめ

明けそめて仙石原に雉きじ一声いっせい

木村 歩歩

燕来てカリヨンの鐘昼を告ぐ

「ありがとう」紫陽花の駅掲示板

打球追う丹沢越しに皐月富士

いづこから吹くや黒南風津軽にも

今泉如雲

バスケ部の大き手のひら鉄線花

明易の浅き眠りに浅き夢

可美真手命像よ夏安居

今泉由利

散策や茅花流しに導びかれ

潮入りの池に混まぎるる夏の海

干満の潮入りの池花菖蒲

かさね吟行会

「浜離宮恩賜庭園」 6月

田中清秀

久しぶりの吟行である。今年三月からコロナ禍で中止となっていたが、緊急事態宣言がやつと解除されて限定ではあるが多くの庭園の入園が許され出した。かさね吟行会では二度目にはなるが、交通の便が良く集合しやすいとの判断で、今回は中央区にある浜離宮恩賜庭園を訪れた。令和二年六月十二日、天気予報では雨模様だったが、幸いに明るい日差しが戻り気温は二十八度と初夏の風が吹く爽やかな天候となった。

浜離宮恩賜庭園は、海水を引き入れた潮入の池と二つの鴨場があり、広さは約八六〇〇坪あり江戸時代には江戸城の出城としての機能を果たしていた徳川將軍家の庭園である。その後、歴代將軍によって幾度かの造園と改修が行われて十一代將軍家斉の時代にほぼ現在の姿が完成したと言われる。明治維新の後は、皇室の離宮となったが、震災や戦災で損害を受けて往時の面影はなくなってしまう。昭和二十年東京都に下賜され、恩賜庭園とし

て公開され「旧浜離宮庭園」として国の特別名勝、特別史跡となつて現在に至っている。

庭園は、近代的な高層ビルが借景として立ち並び、また、近くには築地市場や劇団四季の自由劇場などが有り、高層ビルと自然豊かな庭園のコントラストが美しくおもしろい。大手門をくぐると將軍家宣の時代に植えられたと言う「三百年の松」が太い枝を低く張りだして、今なお堂々とした姿で迎えてくれる。さらに進むと延邊館(迎賓館)の跡地の広々とした芝生の広場、そして、庭園の中心は都内では唯一と言う海水を取り入れた「潮入の池」が有り、潮の満ち引きによる情景の変化が楽しめる。池にはボラやハゼ、セイゴなどの海水魚が生息しているらしい。また、池を囲むように中島、松、燕、鷹の四つの御茶屋があり、それぞれ歴史資料に基づいて忠実に復元されている。特に、中島の茶屋では和菓子と抹茶が、テラス風の茶席から潮風を受けながら殿様気分を楽しめる。

一服の抹茶に憩ふ杜若

素山

潮の香や櫂の幹にまとふ苔

周二

咲き乱る空堀沿ひの花菖蒲

紀政

園内は四季折々の草花が咲き競う、春は可愛らしい梅の花が、そして三月には三十万本の菜の花が見事に咲き、黄色い花畑になると言う。今はアジサイやガクアジサイ、カキツバタ、ハナショウブがそここに咲いて綺麗である。因みに一昨年、東京府開設一五〇年のイベントとして、庭園内を夜間ライトアップしてカラフルなマツピングがなされ、開放的で素晴らしい景観に演出されたと言う。

だしぬけに鴉声上ぐ梅雨の空
時に吹く黒南風の園重い息

正規
陽子

ネジリバナは、ラン科の花で何処でも咲くことができ、寿命は短い、花茎の周りをらせん状に並んで咲くことからねじり花と呼ばれる。花言葉は「思慕」、ひたすら恋しく思う姿をねじれて咲く花の姿と重ねていると言われ、万葉集にも詠われている。また、英語ではこの花をレディスカールと女性の髪に見立て名付けているのも愛らしい。庭園の芝の周りに可憐なピンクや白の花を咲かせていた。

ねぢばなやねぢれしままにほほけ立ち 由利

潮入の風に片向くねぢれ花

清秀

浜離宮庭園には鴨場が二つある。細い誘導堀を設けて小視から鴨の様子を窺いながら、生き餌で引き寄せて機を見て又手（さで）網ですくい捕る。古いこの猟方は鴨に傷をつけないやり方で先人達の優しい気持ちも伝わってくる。古い鴨場を散策するだけでそんな優雅な情景が偲ばれる。

やっと開催できた吟行会であるが参加者が少ないのは寂しかった。でもお互い元気な顔を見られたのは嬉しい限りである。コロナ禍は未だ収束できない状況だが、来月はメンバーそろって盛大に吟行会を開催できるように願っている。

■かさね吟行会■

日時 二〇二〇年八月十四日（金）

場所 横溝古民家

集合 大倉山駅 改札口 11時

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』(百)

丸山 酔宵子

『外出自粛の断捨離と一日一句』

非常事態宣言の外出自粛で、電車も乗らず外食もせず、勿論飲み屋などもつての外で早2ヶ月。毎日のニュースで流れてくるのは新型コロナウイルス関連ばかりで、とうとう国内外の犠牲者の数は世界で5百万人に迫り、死者も40万人近くに達している。将に世の終わりが刻々と迫って来るようで、毎朝の目覚めもすっきりしない。

日本ではPCR検査が少ないとは言え、何とか小康状態を保っているようだが、毎日夕食時のニュースで発表される全国感染者数で一喜一憂し、やはり二桁となるとビールの味もひと際美味しい。

コロナ禍や外出自粛聖五月

生涯でこんなに時間が自由に使える経験は無く、外出

以外やりたいことは何でもできる環境にあるわけだが、いざ何をもっとも、所詮、時間の浪費以外何物でもない。4月当初の非常事態宣言から暫くは虚脱状態で、ポーッとした日々を過していた。しかし、爽やかな初夏の光と風が心地よい季節になると、「これは時間の浪費、遺憾、無駄・・・！」と心機一転、新たに二つを実行することに決めた。まずは積もり溜まった我が人生の断捨離である。

子供時代からのアルバムや写真、手紙、原稿など書類、通信簿や賞状、デッサンや油絵、水彩画、国内外の絵葉書や美術館カード、書棚一杯の書籍、雑誌、古い背広やコート、セーターにジャケット、Yシャツ、ジーンズやチノパン、下着、ソックス、ネクタイ、カセットテープ、フロップディスク、CD・・・出てくること出てくること・・・。写真も手紙も一つ一つ、一枚一枚思い出し感傷に耽ふけりながら、生涯のごみを思いっきり捨てること捨てること。アーツ、すっきり将に断捨離・・・。

断捨離や思い出残し風青し

もう一つは、一日一句の俳句作りの敢行である。昨今はよくできていて、インターネットサイトには「季語別俳句集」(<http://www.haisi.com/sajiki/5gatu.htm>)があり、一年365日の毎日の季語が15個掲載されている。

今宵はコロナ禍をよそに、5月のスーパームーンのフラワームーン。フラワームーンとは5月の満月のこと。先人たちは、時の流れを知る一つ的手段として、月の位置や満ち欠けを観察し、アメリカ先住民であるインディアンがフラワームーンとロマンチックに名付けたとのこと。今年は雲が多かったが、雲の流れが速く、その合間の輝かしいスーパームーンが、コロナを吹っ飛ばしてくれた。

今日で一日一句は3週目、果たしていつまで続くやら・・・。

風薫る雲間に昇るフルムーン

酔宵子

楽しい時間 93

2020年6月30日

山本紀久雄

神にならなかつた鉄舟・・・その二十三

前号に続く「江戸開城談判」壁画についての検討②は、実は「嘆願」であるのに、壁画題名を「談判」としたのはなぜか。海舟は『慶応四戊辰日記』3月14日で《同所に出張、西郷に面会す。諸有司之嘆願書を渡す》と書いている。つまり、「談判」ではないと認識していたのである。中外新聞記事でも「御嘆願相成り候」（右から4行目）となっており、「談判」とは記していない。だが、挿絵のキャプションは「勝と西郷江戸開城談判」とある。

記事本文では「嘆願」、読者の眼に入りやすい挿絵では「談判」、この使い分けをどう理解すればよいか。

この背景・理由検討には、当時の江戸市民感情について考察

前号に続く「江戸開城談判」壁画についての検討②は、史

【三三、中外新聞】三月十五日の御願書 ○此度御征討使御差下相成、今十五日江戸表御討入の風聞有之候付、御願相成候處、大總督府へ何濟まで御討入の儀見合候旨、參謀西郷吉之助相答候に付、屋敷井に市中共衆に動搖いたし意外の不都合相生し候ては以の外の儀に付、諸事詳察にいたし御沙汰相待候様致候。三月

【三三、中外新聞】去る十五日頃より三街道の先鋒追々江戸へ入込み、毎日市中を巡見す。然れども先々平穩にて市中の者一同少しく安堵す、何卒暴發の異變これなき様に致したき事なり。此度かくの如く穩かなるは、日光宮様の御取扱、殊に勝安房守の盡力にて、參謀西郷某の周旋に依り平和に成たる由なり。

しなければならぬ。

今の東京は地方から雑多人種が集まっているから、純粹の江戸っ子という人たちは目立たないが、江戸時代は人の移動が少なかつたので、町には江戸っ子氣質が溢れ鮮明だった。その江戸人の氣質は、一般的に、気が弱く、根気がなく、見栄坊で、いささかニヒルというのが定説である。礼儀正しく、粹でおしゃれなところ、向こう意気の強さ、これらは見栄を張るところから来ている。上は旗本から、下は裏長屋の住人まで、江戸っ子に共通するこの氣質は、別の表現におきかえると、「騙されやすい」ということでもあった。加えて、もう一つ大きな重要で本質的な問題は、当時の日本政治が江戸で行われていなかった、ということである。

徳川將軍十四代將軍・徳川家茂が、文久二年（1862）2月、孝明天皇の妹和宮を正室に迎え、翌文久三年（1863）3月上洛したあたりから、幕末の複雑な政治の舞台は京大阪になっており、家茂が第二次長州戦争の敗報を聞きながら、慶応二年（1866）7月に大坂城で没し、慶喜が十五代將軍に就いたのも江戸ではなかつた。このように慶喜が鳥羽伏見の戦いで敗れ逃げ帰るまで、幕末の江戸城には將軍が留守であつたのであるから、江戸は政治の表舞台で



参謀西郷吉之助相答候に付、屋敷井に市中共衆に動搖いたし意外の不都合相生し候ては以の外の儀に付、諸事詳察にいたし御沙汰相待候様致候。三月

はなかつた。結果として、時代の政治先端情報は京大阪から、時間軸で遅れて入ってくる情報によって、江戸在住の武士と市民は理解するしかなかった。

これが江戸に住む人々を情報音痴の状態にさせた決定的な要因である。加えて、当時の江戸のマスコミはすべて佐幕・反薩長派であったので、幕府有利・官軍不利という報道が中心に展開しており、これを江戸っ子は疑問を持たず、鵜呑み信じたのである。

これら当時の江戸状況について、司馬遼太郎が大村益次郎を描いた『花神』(新潮文庫・下)で適切な解説をしている。《そのころの江戸府、瞥見》

江戸では、新聞・雑誌のたぐいが飛ぶように売れた。多くが旧幕臣か、その関係者が編集しているためにどの新聞も佐幕・反薩長で、脱走とよばれている旧幕兵が各地で連戦連勝しているぐあいの記事であり、連戦連勝でなければ売れなかつた。日本の新聞の反官権的性格というのはこのときでできたのかもしれない。

たとえば、「宇都宮大合戦」

という「内外新報」閏四月三日付の記事では、四月二十日朝、脱走方が城へのりこみ、幕軍のシンボルだった日の丸の旗に東照神君の旗數十本を押し立てて「はなばなしく合戦致し候。脱走方勝利」とあり、関宿での戦闘も脱走方の勝利で「その人数幾万人これあり候や」と、その勢力が日に日に大きくなっていることを告げている。

さらに、閏四月二十九日の「此花新書」という新聞では、そのころすでに江戸に入りこんでいた官軍の人氣が、江戸市民にいかにも不人氣だったかという一側面をつたえている。下

谷坂本あたりを一人の官軍の武士が錦切れをつけて通りかると、町角で遊んでいた幼童が

「おじさんは、錦切れをつけておいでだから官軍かえ」ときくと、武士はそうだと答えた。幼童はこの武士と遊ぼうとおもい、

「おじさんが官軍なら、坊は会津だから、坊におしたがいい」と、いったという。江戸の市民のほとんどは、薩長はいずれは負けるとおもっていた。幼童でさえ官軍が軍事的にも弱い上にモラルの上からも悪く、一方会津ということばで象徴される旧幕府方に正義があり、さらに軍事的にも強大であると信じていた》

当時の落首にも江戸っ子の感情が鮮明に表れている。「上方のゼイ六どもがやってきて、トンキョウなどと江戸をなしけり」

「上からは明治などというけれど、治まる明(おさまるめい)と下からは読む」

これが東京市民の本音であった。この状況下で報道された中外新聞である。確かに海舟日記が《同所に出張、西郷に面会す。諸有司之嘆願書を渡す》と書き示しているの、記事文言では「御嘆願相成り候」とはしたが、江戸っ子の読者の心理面を考えると、官軍の西郷と徳川方の海舟とは同格、いや、ついこの間までは芋侍とバカにしていた薩摩藩士である。ここは「嘆願」ではなく「談判」と言葉を変えることで江戸っ子心理に応えたい。このようなマスコミの一般大衆受けの姿勢によって『中外新聞』の挿絵ではあえて「談判」にしたのではないかと推察する。

次月続く。

絹の話 (117)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

インドへ絹の伝来

今日まで絹の話を縷々書いて来ましたが、現在世界第2位の絹生産国で、第1位の消費国インドの話を書きませんでしたので、インドの絹の話をしてみようと思います。しかしインドは高温多湿で、墳墓等に繊維の遺物が少なく、古くから綿文化の国ですので、絹に関する資料文献もあまりありませんので、私の推測でお話します。

中央アジアの民族移動

紀元前2000年頃インダス川周辺のモヘンジョダロなどで栄えたドラビタ人がその後起こる民族移動の波に押されて西インドに侵入して、インドで拡散しつつありました。紀元前1000年頃アーリアン系住民がドラビタ人を南インドに押しやって、その後中国中部の月氏が中央アジアに逃れて交易の民大月氏となり、ネパール方面にまで勢力をのびして、アーリアンを中央インドへと圧迫し、今日のインドの民族分布が形成されています。

1) ドラビタ人説

インドへの絹(家蚕)文化の持ち込みはドラビタ人もたらしたという説がありますが、この時代まだ絹の製法がモヘンジョダロのドラビタ人に中国から伝わっていなかったと思われます。アーリアン人は大月氏との接触でその製法を知っていた可能性はありますが、大月氏は絹の交易はしていましたが、製法までは会得していなかったではないでしょうか。

しかしカシミール方面で養蚕が今日も盛んです。カシミール地方は養蚕に適した気候で、よりローマに近いので、後年中央アジアから伝えられたと考えます。

2) 西ベンガルにタイ方面から伝播説

揚子江流域で1万年前昆虫食から始った蚕糸方法がタイ方面を経由してベンガル方面に伝わった可能性は自然な事と思われます。

ベンガル地方は桑葉が常に繁茂するので、蚕が短期間で多くの子孫を残そうと、4眠蚕の蚕が3眠蚕(3回休眠)で多化性(休みなく羽化する)に進化し、桑の葉の栄養素も北の葉とは異なる様になり、その葉を食べた蚕が黄繭(黄色の繭)に変化するなど、南方種に進化した蚕が伝わって来たと考えられます。

3) 海のシルクロード説

漢の武帝はシルクロードを拓きましたが、パルチヤ(中央アジア)方面で隊商が運ぶ品々の略奪があまりに

も多いので、南に新たな陸路を開こうとしましたが、ヒマラヤの山々に阻まれ、やむなく海路のルートを開く事にしました。好都合な事に当時南インドを支配していたサータヴァーハナ朝（*北インドはクシヤナ朝）はインド洋交易をしていて、すでにローマに通じていましたので、ジャンク船からダルマ船へと荷物を積み替え、安全な交易ルートを確保する事が出来ました。そればかりでなく、インドの珍しい品々も手に入れる事が出来ました。この時南インド方面（ケララ、カルナータカ）に中国式の養蚕、製糸技術が伝えられたと思われれます。その後タミールナドにも伝わって行ったでしょう。

4) 日本から南インドへ養蚕技術

今日インドを代表する絹生産は南インドのアンドラプラデーシユ洲、カルナータカ洲の高原地帯です。

この養蚕は現在のインド財閥の創始者タタ氏が1889年来日し時、絹の生産興隆の著しい日本の養蚕を導入したのが始まりで、インドの在来種と日本の蚕種の交配などの研究を重ね、さらに1980年代に日本と養蚕技術交流を重ねて、今日の高級なインドシルクに発展しました。

その特徴は生繭（蛹を殺さない）から糸を揚げる「アヒンサー」シルクで、乾繭では及ばないしつとりとした艶があり、その美しさは垂涎の一品となりました。

野蚕蚕の宝庫インド

インドの熱帯雨林には数多くの繭糸昆虫が生息しています。その中で現在産業として利用されているものはタール蚕、ムガ蚕、エリ蚕です。これらの繭生産は今日でも北東インドで地場産業として盛んです。

野蚕は桑の葉は食わず、それぞれ食べる木の葉が違い、森の中で棲み分けをしています。

これらヤママユガ科の特徴はガイコガ科の繭には見られない多孔質繊維です。この繊維は温度、湿度や防紫外線性、緩衝性にも優れていて、過酷な環境に順応出来る命のカプセルとなっています。人々がこの繭を生活に利用し始めたのは家蚕よりも古いと言われていますが定かでは有りません。バラモン等の宗教に支えられた古代のインドの人達は殺傷を忌み嫌ったので、昆虫食から絹生産が始まった他の国々とは異なった発展をして来ています。

インドシルクはタール蚕

薄茶色で糸が荒々しくて通常の絹とは違うシルクを見ると多くの人が「インドシルク」と言います。

これがタール蚕から採れたシルクで、生糸は美しい艶があり、紬は薄茶で力強い美しさに満ちています。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2020年6月26日

低体温と自律神経

湿度により

髪の毛が暴れ出すと梅雨を感じます(笑)

今年は例年以上の寒暖差に

外出時の服装も難しいですよね

その寒暖差により

発汗しにくくなったりして

身体の温度調節が上手くいかなくなってきました

そうすると

起床時の怠さ

夕方の不調

寒気

火照り

睡眠時の足の裏の熱さ

などが出て来ます

こっぴつ時は

低体温により自律神経が乱れています

ですので

湯船につかり深呼吸

温かいものを飲む

ゆたぼん を使う

軽く身体を動かす

などして体温を上げてみてください

身体の声を聞き 目を向けてみましょう

今日も笑いながら行きましょう

2020年6月29日

普段の日常

朝からお天道様の陽射しは
とてもありがたく感じます

陽射しを浴びて身体と心を安定させましょう

空を見上げると青空が綺麗で

気がつけば雲が夏の雲になっていて

ゆっくと流れて行きます

普通の生活があり環境があり

周りにいつもの人がいていつもの風景があります

普段の日常といつのは

本当に当たり前に過ぎて行きますが

例えば

体調を崩し生活がままならなくなったり

身近な人に不幸があったりなど

生活が変わりますと

普段の日常がとてもありがたく感じます

いつもの

嫌な事や面倒な事が少しあるくらいの方が

いいのかもしれませんが

周りの人を普段の日々を

そして自分自身を 大切にして行きましょう

今日も笑いながら行きましょう

「江上浩二の独り言」 32 江上浩二

とけい（土圭）

現代人には、頭の中には概念として、旧暦（太陰暦）と今我々がお世話になっている新暦・太陽暦があることを知っている。しかし、人が年間の四季を通じて、肌身で感じる日常の生活では、「心」か月制の太陽暦と季節感や二十四節気との間に、実は乖離があることを感じている。

先日知り合いが、twitterで日の出から日の入りまでの時間帯を6等分する不定時法について呟かれていて、昼の八つ時に間食をしたのが「おやつ」の語源だと教えてくれた。

ちよつと横道に逸れた8年近く前の「おやつ」のお話。

マイブ로그 投稿日… 2012/10/20

題目：お八つ

平成24年10月16日の知り合いのSさんのtweet。

「六つ」というと午前の6時ころか、18時ころか
が分からないので、午前は「明け六つ」で、午後は「暮
れ六つ」と言った。室町ころから日の出から日の入
りを6等分する不定時法が定着した。ひるの「八つ」
はだいたい14時ころで、その頃間食をしたので「お
やつ」というのだそうだ。

今風にいうと「おやつ」は大体午後3時ころに、
腹が減って来た頃に口にする、お菓子みたいな食
物のこと。

横浜生まれで、その後神奈川県中部、茅ヶ崎で
育った私の記憶では、友人の実家（大農家）ではお
やつを「おこじゅ」と呼んでいた。それはネットな
どがない昭和40年前後の頃の話。今、ネットを紐解
くと、「おこじゅ」は神奈川県や多摩地域の「お
やつ」のこの方言と説明されている。

さて、知り合いのtweetでは旧暦の時間の分割の
仕方が西洋風とは異なり、日本では不定時法によ
ると、昼の八つは今の午後2時ころになるそうだが、
今は定時の午後3時ころに口にするちよつとした食
べ物が「おやつ」になってしまっている。

さらに続けると、今我々は1日に三食食事を取っ

ているが、その昔は日本も西洋も朝、夕の二食だったと聞いている。そんなことで、身体を使う仕事をしている人が殆んどだった昔はちょうど腹が減る頃に何かを食したいことになる。所謂、おやつ・間食で、恐らくそれが昼食（ランチ）となり、三食制へと変わっていたのではないかと推測出来るのである。

現代人は、朝、昼、晩と三食も食らう人種となつてしまつても、さらにおやつと称して午後3時ごろ何かお菓子みたいなものをしつかり食べるようになってしまつている。昼食を食べることが本来のおやつとするとそれで十分なはずである。

そんなきつかけで、毎度の通り部屋の隅に積み上げてある古本の中に、確か古い時刻制度のことを書いたものがあるはずだと探し出した。それは、『日本の時刻制度』橋本万平著（塙書房；昭和41年9月20日発行）である。

地軸が傾いているので、地球上の何処に住んでいても、季節によつて昼夜の長さが刻々と変わるといふ生活は避けられないので、便宜上不定時法が浸透したのだと思つている。今、我々は時間を計る仕組みやその機械装置のことを『とけい』と呼んでいるが、古くは水が滴る量を

もとに時を見ていたので、それは漏刻（水時計）と呼ばれていた。手元の古本には陽とともに暮して来た人の習慣で、昼間の明るさ（猫時計；猫の目の瞳の細さを便宜的に利用）や棒を立てて、その蔭の長さから時を知る方法が浸透している事も説明されている。その棒は長さが2尺又は4尺あつて、蔭の長さや方向で冬至の日まできちんと読みとつていて、『土圭』と呼ばれていたそうだ。それが今の時計という言葉に変化したようだ。

現代最新物理では、重力によつて時の刻みも影響を受けてしまう事（アインシュタインの理論）や人知を遥かに超えた精度を持つ時間の計測方法が確立されてはいるが、所詮我々の生活は一息や一歩という尺度ですむ事が多く、農耕は太陽と季節、漁師は潮の流れ・満ち引きを正確に理解する事で、糧を失わぬよう叡智を凝らしてきた。腹時計の方が有用な時もあることを忘れてはいけないうようだ。

偶々、同じような時に、twitterで2013年の新年が『新暦』の1月23日に始まる13カ月制の旧暦をベースにした手帳なども販売されていること（ルナワークス）も学んだ。有難い仕組みである。旧暦手帳を買いに行こうと思う。

漢詩研修 (四十六)

千代田岳精会 平井茂行

山やまの夜よる

嗟さ 賦が 天てん 皇おう

居きよ移うつして 今夜こんや 薜蘿へいらくに 眠ねむる

夢む裏りの 山さん 雞けい 曉ぎょう天てんを 報ほうず

覺おぼえず 雲くも来きたつて 衣ころも暗あんに 湿うるう

即すなわち 知しる 家いえは 深しん溪けいの 辺ほとり 下した 近ちかき

【作者】 嵯峨天皇（七八六～八四二）第五十二代の天皇。平安初期の漢詩人・書家。御名は神野。延暦五年九月七日、桓武天皇の第二皇子として長岡宮に御降誕。平城天皇の同母帝。御名の神野は乳母の姓による。書にも卓越し、釈空海・橘逸成とともに「三筆」と称される。

特筆すべきは漢詩に長じられていたこと。五言律・七言律・七言古詩・七言絶句・五言絶句・などにすぐれたものが多く、御遺作は九十余編。『凌雲集』（二十二首）、『文華秀麗集』（二十九首）『経国集』（三十首）にその大半の御作が収められている。

【語釈】 ○薛羅……まさきのかずらとつたかずら。○夢裏……夢の中。裏の中の意。○山鶏……やまどり。山鳥。きじ、に似た鳥である。○暁天……明け方の空。あげがた。○暗湿……「暗」は、それとなく。いつしか。知らないうちに。

【備考】 嵯峨天皇は唐の文化の移入に努められ、仏教文化の興隆を図られたお方だけに、初唐の王勃や駱賓王などの詩風もよく体得しておられ、『経国集』巻頭の「春江賦」などは、まさに宋代の歐陽脩や蘇東坡以前のものである。漢学を奨励され、御自身も中国の事情に精通されていたため、日本の風物を吟じて、それが中国のものを吟じたと思われるほどの作品である。

『タカシ』

中屋保之

『主人が逝ってしまいました』平成最後の年、二〇一八年四月七日の何時頃だったか、ナオミちゃんから電話が入った。返す言葉が出てこない。

二週間ほど前だったか、彼が国立がん研究センター病院の集中治療室（ICU）に運ばれたことは聞かされていて、見舞いに行つて欲しいとの事。私の妻もここに世話になつていたので場所は認知していたが、たしか、親族以外は入れないはずでは、とナオミちゃんに尋ねたところ、本人の意思で私を入室可として登録していたそうである。彼の私に対する友情以上の思いを改めて痛感した。

私たち昭和二十二年〜二十三年生まれは、戦後ベビーブームの先頭集団で、良きにつけ悪しきにつけ話題となる年代であった。

昭和三十五年四月、彼と私は東京の板橋区立板橋第二中学校で出会う。記憶では、一クラス四〜五十人で十クラスほどあったように思うと、その出会いは運命としか言いようがない。何がきっかけかは、今となつては定かではないが、彼は恰幅がよく、やせつぽの私に興味を持ったのかもしれない。ある時、授業中に先生が私に向かつて「中屋健一という学者がいる」といったのを、彼が「ケンキチ」と聞き違えて何故か大うけにうけ、以来、親しい仲間にはそれが通り名となり今に至っている。その時の彼の弾けるような笑顔は、いまでも私の脳裏から離れないでいる。「人懐っこい」とは彼の代名詞、中学校の廊下の防火シャッターを悪戯で壊しても、叱られてへこむ様な様子は見受けられなく、私を相手に濡れ雑巾を手榴弾と称し投げ合う。それら全てが笑顔の渦なのである。我が家に遊びに来ては、やや気難しい私の父を「おやしさん」と呼び、スツと懐に入り込み笑顔にしてしまう不思議な特性を持つ好漢であった。

この気質は、彼のご母堂のものを引き継いだようである。友人の一人から聞いた話で真偽のほどは定かではないが、都立高校受験の当日、母子揃って朝寝坊したため受験に間に合わないという事態になった際、二人で大笑いをして泰然と私立校受験へと気持ちを切り替えたそうである。そんなご母堂には、私も随分と可愛がついていただいた。当時は、巷に子供たちが溢れていたせいか、どここの家庭でも自分の子どものように面倒を見てもらえた良き時代でもあった。

彼との縁は、大人になっても不思議と繋がってゆく。将来私の妻となる女性とも、持ち前の「人懐っこさ」ですぐに打ち解け、時には満面の笑顔で「美代子！」と呼び捨てする始末。それがなんとも妻と私にとつて心地よいのだ。彼とナオミちゃんは、彼女の職場である某デパートで知り合ったそうである。なんとそのデパートに妻も私と結婚する前の一時期勤めていて、時々、会いに行くのに付き合ってもらった記憶がある。

そんなこんなで、彼とナオミちゃんの結婚式では、司会の大役をさせて戴いた。もちろん、彼は私たちの式に人の人懐っこい笑顔と共に出席してもらった。

築地の国立がん研究センター病院の通用門に大きな桜の木がある。見舞いの帰り、満開の花を見上げて回復を願った祈りは通じなかった。なんとも速すぎる旅立ちが悔しい。妻を亡くし落ち込んでいた私を何度となく支えてくれた、かけがえのない家族同様の友に感謝したい。

彼の名は『鈴木 隆』、私は『ケンキチ』

飲酒いんしゆ

桜台楼主人おうだいろうしゆじん

三十余年さんじゆうよねん 露台ろだいに在りあ

往者おうしやを追懐ついかいすれば 亦悠またゆうなる哉かな

吾われを知るしは相対あいたいす 老桜樹ろうおうじゆ

終歳しゆうさい心こころに諧かなう 樹下じゆかの杯はい

飲酒

令和二年五月二十七日

三十餘年在露臺 追懷往者亦悠哉
知吾相對老櫻樹 終歳諧心樹下杯

(語釈) ○露台・・・テラス。○往者・・・過ぎ去ったこと。○終歳・・・一年中。

(解釈) テラスを見つめながら三十年余が過ぎている。それこそ色んな事があつたけど、それだけに思つてもつかみ処がない。

私を理解しているのはテラスの向こうにあつて毎日相對している桜の木だ。一年中何時でも桜の木を前にして杯を挙げるのを氣に入っている。

(解説) コロナのお陰か、しずかに考えたり普段より詩作の機会を持つてると自覚する。

岳精会に専念するため、祖宗範の家に入り家内と子供三人で同居して三十三年が過ぎた。もう両親のお二人も亡くなつていない。孝行は出来てない、あまり良い養子とは言えない。と言いつつ少し肩の筋肉が楽になるから不思議だ。岳精会の事も色々あつた。五里霧中、悪戦苦闘で何とか過ぎて来た。時が今も過ぎてゆく。

テラスは二階の物干し場であり、そこに通じる板張りの出入り口に移動式の小さな机を置いて桜台楼主人と見栄を張っている。場所が狭いため生来の整理苦手が輪をかけている。

しかしここに来た時からテラスとその向こうに見る桜の木は小鳥の鳴き声と共にお気に入りだ。その若木がテラスに枝を張つたら面白いなと思つたら何年もしないうちにその通りになった。今は仕方なく枝を打ち払っている。

春には吾が為に花開き、「おお、よく咲いてくれた」と小枝に手を触れて愛でる。葉桜が良い。夏の蟬は目の前で懸命に鳴く。秋の清けさ、葉を打ち落とした幹と枝にも趣を感じる。

今ではあまり独酌もしないが、四季折々に語り合うようにして酒を飲む。宗家就任の前後には「自粛・断酒三年」の時もあつた。どんな時も桜樹を見つめて来たのだ。(横山精真)

仏像彫刻 (七)

藤崎 徹

「薬師如来」は、2009年に模刻することになりました。2009年、京都・高雄・神護寺「国宝・薬師如来」の彫刻を開始しました。

一尺五寸、45センチの御身、全体は、76センチの「薬師如来」です。この年の11月に、京都・高雄・神護寺を拝観できました。この時、「薬師如来」を中央に、右に「日光菩薩」左に「月光菩薩」を従え「薬師三尊」の一体像であることを知らされました。

この年の暮れには、日光、月光菩薩用の木材を入手して準備を進めました。2010年には二体を同時に完成したいと粗彫りを進めましたが途中で間に合わず一体ずつの制作に切り替え、「月光菩薩」を先に、「日光菩薩」を2011年に予定いたしました。





2010年10月、「**月光菩薩**」を完成しました。全高は、70センチメートル、御身は、45センチメートルあります。薬師如来の右の脇侍です。



2011年「**日光菩薩**」を完成しました。全高は、70センチメートル、御身は、45センチメートルあります。薬師如来の左の脇侍です。

見る (2)

夏 目 勝 弘

この三次元の縦・横・高さの物質的の考え方、肉体的な思い、そして多様性のなかで正しく見ることが出来るであろうか。

まして諸行無常の人間社会において、自分を無にしてモノを正しく見て、表現することは出来ない。

多様性の見方するには、自分の内にその多様性がなくてはならない。その多様性の質と量が、正しく見ることに大きな差が出てしまう。

ではどのようにすれば、多様性が身に付くのか、その生き方は個人個人によつて違ってくる。

いかなる一生を過ごしてきたのか、ただ時間の流れのままに生きてきたのか。

芭蕉のように俳諧の完成と普及をもとめ、西行と同じように、一生を旅に終えた。

深川の草庵に住み、そこで仏頂禅師に出会い禅の修行に励む。禅の修行は、風を食べ水を枕に寝る、というほどの、一衣一鉢に甘んじる厳しいものである。このことで生涯を旅に終へたと思う。

○旅人と我名よばれん初しぐれ
芭蕉の旅における作品から、多様性等をみてみることにする。

○野ざらしを心に風のしむ身かな
と吟じ「野ざらしの旅」にでる。四十一歳初老を迎えた(貞享元年八月)近畿地方へ旅立つ。死期に会わぬまま亡くなった母の遺髪を握りしめ

○手にとらば消ん涙をあつぎ秋の霜
母の周忌をすませ、吉野の西行法師ゆかりの草庵にて

○御廟年経て忍は何をしるのぶ草
不破の関を越えるとき

○秋風や藪も畑も不破の関

無事に大垣の谷木因の家泊る
○しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮
尾張の白鳥山で

○何とはなしになにやら床し葦草
「野ざらし」の本文には、

○山路来て何やらゆかしすみれ草
の句を作意的に改めたものとして有名。

江戸に帰る途中、水口の宿で、旧友服部土芳に「二十年を経て
古人に逢う」と

○命二ツの中に生たる桜哉
貞享三年三月、芭蕉庵の俳席にて

○古池や蛙とびこむ水の音
蛙は鳴くものとして詠まれてきたのを飛び込む蛙の水の音として、小さな躍動する生命を表現した。

「自分に嘘がつけぬが詩の心」が芭蕉の念い。

○閑けさや岩にしみ入る蝉の声
「岩にしみ入る蝉の声」これは嘘ではない現実を感じていた、とある。立体的な考えのなかに、人間としての懐の深さがあるように思える。

十月八日夜中に、舟舟を呼び辞世の句を、
○旅に病んで夢は枯野をかけ廻る
と書きとらせた

翌九日支考に対し、嵯峨の大堰川での句
○大堰川浪に塵なし夏の日
と先日、園女のところまで詠んだ

○白菊の目に立て、見る塵もなし
とが心にかかり、心残りでならないと

○清滝や波に散込青松葉
とあらためて詠みなおし、十月十二日に死す。

○この道や行く人なしに秋の暮 芭蕉

「氷魚」のことから (235) 岡本八千代

今日から入梅になった。庭にはダチュラの花が白くゆれて
いる。紫陽花の花も咲き出してこれも白い。白、白の花の中
にかこまれた私の籠り部屋に来て「氷魚」を書き出す。

やはり、息子の(二男)北杜夫の「青年茂吉」の著書をも
とにして書いてゆく。

茂吉は、「赤光」の歌集を出してから、かなり有名になっ
て、アララギだけではなくおおげさに言えば日本中に有名に
なっていたが、「今後『赤光』の歌を論ぜられる場合には、
改選『赤光』の方に拠ってもらいたいと思う」と記してい
たほどだ。それは、「赤光」に載せた歌を恥ずかしがって、改
作したりしていたことによる。茂吉の弱気の方が出ているこ
とではなからうか。なお、上田三四二氏は、

○ 現世の歌づくりは、つくづくとおのが悲しき Wome に
住むがよい。

○ 僕のやうな物に臆し、人を恐れ、心の競ひの少ないもの
が…。

○ 僕には一種の臆する性癖があつて…。

○ 私にははにかむ性質があつて…。

○ 己には弱いところがある。
○ 気の弱いほうが不運にしてまさにへたばらんとした時
に…。

と、「いろいろな本とか、会話の中でも言っていた」と言
われている。

ところが「いざ論戦の時には、炎のように勢いたち、敵を
粉微塵にせずんばやまぬ」文章を乱発した男が、ちよつと並
べてみても、これだけの弱気の言葉を残していたのだった。
やつぱり、強い一面と、なよなよとした柔軟な心との二面
性を以っていると思ふ。人は誰もそういう処があるかも
しれないとも、いや三面性を以っているかとも??。

また、「あらたま」編輯手記」には、こう書いている。

○ 「いざ清書しようとする」と、見る歌も見る歌も不満で
溜まらない。落胆と失望とで為事が中絶した」と。

そして「赤光」の時と同様に、かなりの歌を改作したので
あった。また「編集の了った今では、希望のかわりに只深
い深い寂しさが心を領している。その間に、人知れぬ煩悶も
あったのであるが、今ではそんな心の張りも無くなってい
る」などと、しおらしい。

さらに、一般人と異なるのは、

○ 「そうして『あらたま』の発行ももう間もないこと
であらう。僕の此のあわれなる歌集に幸いたまへ。」

○ 「神々よ、僕の歌集を護りたまへ。」
と、あからさまに記していることである。

北杜夫は、「自分の(茂吉)本の出版に際して、このよう
に神に頼るような言葉を、臆面もなく書きつける男がこの世
に果しているであらうか」など、と言いながらもまた「真に
迫った本音だ」とも言っているのであった。

私もこういう処が茂吉らしさ、時に少年のような無邪気さ
のある一面を思うのである。

編集室だより【二〇二〇年六月】

今泉 由利

生きてゆこう。

○「午後七時に、パソコンを開けていてね！」とNYからの指令。

○三河アララギ四月号の「編集室だより」が、新型コロナウイルスについて書きはじめでした。すぐ通り過ぎてゆくだろう…と書いていました。長く恐ろしいコロナ対決になるなどと、思ってもみななかったのに、八月号の「編集室だより」には、増々重苦しく、いたたまれない最中です。そして、せめて自身を守ることしか出来ないでいるまま。

○NYの子達は「出入りして、バイキンを家に持ち込むといけないから、日本へは行けない」と。空気清浄器やら消毒グッズ：などなど、送り届けてきて、一步も家の外に出なくても生きていられるように、気遣ってもらっている。だから、へまをしないよう、自宅生活を守っている。

○仕舞い込んでしまうと、忘れてしまうからーと、地球をかきまわって増えた品々、興味のために集めた資料・・・だいたいの物が、通り掛って気付けるように広がっている。そんな品々に気を遣う暇もなく、次から次から増えてゆく。飽和状態だったところへ、家の中に居て、どこへも行くなくても良いという。過去を見返す時がやってきた。

○忘れ去ってしまったてはいけないことを、沢山沢山みつける日々となった。思いがけず、生きているうちに、自身を振り返ることができ、こんなに沢山の経験をしたのだから、この経験をしっかりと重ね合わせて、融和して、これからの

○パソコンを開けると、星野源さんの「ソロ・デビュー・10周年記念配信ライブ」だった。無観客の配信ライブ。ライブハウスのフロアを、バンド・メンバー七人を、センターステージ仕様にして。

星野源さん、10年前にはじめてここで、ワンマンライブをした場所という。

全体を見渡す、距離が近く、自由なフィードバックに、バンドメンバー全員を、親しく思いはじめしてしまう。

自身が楽しまなければいけない・・・という彼の信条を知らずとも、何となく何となく、楽しくなってきたり、霧囿気。

音楽を信頼し、それを伝えようとする彼の熱心、心地良いリズムと歌声と…。どんどん引き込まれてしまう。

そして、適材適所の「ありがとう！」やさしさと、あたたかさと・・・もつといっぱいの内容をもった、本当の彼の心からの「ありがとう」を、私も、自身を込めて「ありがとう」と思うのがあった。

○上手に使えなくて、モタモタしているのをよそに、新しい方法で、どんどん突き進んでゆく、今の人達の、とびぬけてすごいことが出来てしまう世の中を、知らないでいたらもつたない。ことあるごとに、少しでも仲間入りしようとしつつ、知りながら生きていたい。

野菜・果物・まんだら (30) ヤマモモ・揚梅



- ヤマモモ科、ヤマモモ属、*Morella rubra*
- 本州、四国、九州、種子島まで分布。中国、台湾、フィリピンなど。
- 常緑高木。20m～25m
- 花期3月～4月。
- 受粉を風に頼る風媒花。
- 果実を得るには、雌木と雄木を近くに植える。
- 夏のはじめ暗紫紅色に熟れる。
- 街路樹や公園樹が多い。
- 樹皮は、元禄時代の「本朝食鑑」によると「気を下し、虫を殺し、食を消し、悪を除き、毒を解す」殺虫や、解毒剤と用いられた。
- 樹皮を揚梅と生薬、タンニンに富み、止瀉作用。消炎作用、筋肉痛、腰痛用に配合される。
- 果実は、ジャム、缶詰、砂糖漬、リキュール酒に。中国の揚梅酒がある。
- 私の住居の後側。磨り硝子起し、ぼっぼっと赤く映るとき、窓を開けて、ヤマモモ果実を収穫した。大変な悦びだったけれど、いつしか切り払われてしまった。住居の玄関側に大きく繁るヤマモモ雄木は、沢山の雄花を咲かせ、山を成すほど落花させる。この辺り、見渡す限りを尽くし、ヤマモモの木を見ない、こんなに咲いても、果実になることは無い。毎日、幾度となく、雀達がやってくる。雀のなる木みたいに、ピチピチピチピチ、さえずっている。

今泉由利

明治神宮鎮座百年大祭奉祝献詠募集要項

一、献詠歌 未発表の近詠（一人一首厳守）
二、用紙 はがきに限る

献詠は楷書にて書き歴史的仮名遣を用いる（小・中・高校生は現代仮名遣）郵便番号・住所・氏名・ふりがなを付す・電話番号・年齢を明記（小・中・高校生は、校名・学年も記すこと）

一、締切日 九月四日（金）必着
二、選者 大辻隆弘・永田和宏・花山多佳子・森山晴美
（敬称略五十首順）

一、選歌発表 十月二十五日（日）歌会当日 於明治神宮会館
賞 一般 特選 一〇名 記念品贈呈
入選 二〇名 記念品贈呈

一、送り先 小中高生 秀逸作 一七〇名 記念品贈呈
一五—一八五七七渋谷区代々木神園町一—
明治記念総合歌会係 電話〇三—三三七九—五五一—

一、献詠披講式 十月二十五日（日）午前十時

1日 時 明治神宮御神前
一、第百四十三回明治神宮献詠短歌大会
1日 時 十月二十五日（日）午後零時四十分

2場 所 明治神宮会館
3歌会内容 入賞歌発表・表彰・選評

【鎮座百年大祭記念企画】
特別対談 岡野弘彦氏・篠弘氏 ビデオ映像上映
【講演】連続短歌講座（近現代歌人の家族詠）第五回
「釈 道空—人間を深く愛す」 講師 秋山 佐和子氏

◎ 会費不要
☆ 来会者には作品集を贈呈致します。

☆ 作品集郵送ご希望の方は、切手三百円分同封の上お申込み下さい。

※ 特選・入選・佳作・秀逸作に入賞の方には短歌大会前に予めご通知致します。

主催 明治神宮献詠会
〇三—三三七九—五五一—

「三河アララギ」について

◇ 三河アララギ発行所 〒一四一・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
TEL (〇三) 五九二四・二〇六五

◇ URL <http://imazumiyuri.jp/>
E-mail yuriiimazumi@jcom.zaq.ne.jp

◇ 編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇ 三河アララギ誌は毎月発行します。

◇ 会員・今まで会員の方。希望される方。

◇ 会費制 廃止。

◇ 新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。

◇ 振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇ 原稿送付先 〒一四一・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
今泉由利 宛

◇ 原稿は毎月末日までに郵送下さい。